慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	〔講演録〕末の松山波もこえなむ : 東日本大震災と方丈記・源氏物語そして古今和歌集
Sub Title	Waves would surely rise and pass over "Sue-no-Matsuyama" : Tohoku Earthquake and Tsunami (Higashi Nihon Daishinsai) and Hojoki, the Tale of Genji, Kokin-wakashu
Author	小林, 一彦(Kobayashi, Kazuhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2011
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.101, No.1 (2011. 12) ,p.63- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川村晃生教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010001-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔講演録〕末の松山波もこえなむ

――東日本大震災と方丈記・源氏物語そして古今和歌集――

小林　一彦

三月十一日、東北三県をはじめ、日本列島のほぼ東側にあたる広い地域を未曾有の災害が襲いました。多くの方が、お亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。また、被災された皆様には、心より、お見舞いを申し上げます。

『古今和歌集』に次のような歌があります。

深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け（八三二）

深草の野辺の桜よ、思いやりのこころがあるならば、せめて今年は墨染めの色に咲いて欲しい。哀傷部の一首です。「哀傷」とは人の死を悼む歌、「墨染め」の色とは、喪服の色です。今年の春ほど、この『古今和歌集』の歌が身に沁みた、桜の季節はありません。

来年は、鴨長明が『方丈記』を著してから、ちょうど八〇〇年目の年にあたります。そこには、いわゆる五大災厄、

と呼ばれる、火災や竜巻、飢饉、そして地震など、当時、うち続いた天変地異の様子が、リアルに描写されています。

又同じころかとよ、おびたたしく大地震（なゐ）ふること侍りき。そのさま、世の常ならず。山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地（ろくち）をひたせり。土さけて水わきいで、巌われて谷にまろびいる。渚こぐ船は波にただよひ、道ゆく馬は足の立ちどをまどはす。都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、ひとつとして全からず。或は崩れ、或は倒れぬ。塵灰立ち上りて、盛りなる煙の如し。地の動き、家の破るる音、雷にことならず。家の内にをれば、忽ちにひしげなんとす。走り出づれば、地われさく。羽なければ、空をも飛ぶべからず。竜ならばや、雲にも乗らむ。恐れのなかに恐るべかりけるは、只地震なりけりとこそ覚え侍りしか。かくおびたたしくふる事は、しばしにてやみにしかども、そのなごりしばしは絶えず。世の常驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日二十日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、おほかたそのなごり、三月ばかりや侍りけむ。四大種の中に、水火風は常に害をなせど、大地にいたりてはことなる変をなさず。

「海は傾きて陸地をひたせり」とは、津波を、また「土さけて水わきいで」とは、液状化現象を、それぞれ伝えるものです。ちりが舞い上がり、煙のように立ちこめたとか、大地が軋み家が壊れる音が、雷鳴のように聞こえた、とか、視覚ばかりでなく、その時の、息ぐるしさや、響きわたる音の恐怖まで、長明は、迫真の描写で伝えようとしています。このような文章は、曖昧さを好み、オブラートで包み隠すような表現の多い、日本の古典作品にあって、異彩を放っているといえるでしょう。

昔、斉衡の頃とか、大地震ふりて、東大寺の仏の御頭（みくし）落ちなど、いみじき事ども侍りけれど、なほこの度にはしかずとぞ。すなはち、人みなあぢきなき事を述べて、いささか心の濁りもうすらぐかと見えしかど、月日重なり、年

経にし後は、ことばにかけて言ひ出づる人だになし。

古い記録には、斉衡二年（八五五）年五月二十三日に、東大寺大仏の頭部が落ちた、との記事が残っています。しかし、その時よりも、今度（平安末期）の大地震のほうが、すさまじい被害だった、と『方丈記』は記しています。そして鴨長明は、その後に、注目すべきことを、書き加えていました。平安京を大地震が襲ったときは、生き方を改めようと思う人も多くいたかと見えたけれども、年月が経過するにしたがって、人々の関心は薄れ、最近は地震のことを話題にすることもなくなった、とあります。

今回の東日本大震災では、当初、「想定外」ということばを、よく耳にしました。実は、過去にも、東北の太平洋岸、三陸地方を、大きな地震と津波が襲ったことがありました。平安時代のことです。そのことを伝える古い記録もありましたが、「想定外」ということばは、そのことに注目する人がいかに少なかったかを、はからずも物語っていたことになります。貞観十一年（八六九）五月に起こった、大地震そして大津波の記事です。

廿六日癸未。陸奥国、地大いに震り動へ。流光昼の如く陰映す。頃之に、人民叫呼び、伏して起つこと能はず。或は屋仆れて圧され死に、或は地裂けて埋れ殪にき。馬牛は駭き奔りて或は相昇りて踏む。城郭倉庫、門、櫓、墻壁頽れ落ち顚覆ること其の数を知らず。海口哮吼え、声雷霆に似たり。驚濤涌潮り、泝洄き漲長りて、忽ち城下に至り、海を去ること数十百里、浩々として其の涯諸を弁へず、原野も道路も惣て滄溟と為り、船に乗るに遑あらず。山に登るも及び難くして、溺れ死ぬる者千許、資産も苗稼も殆と孑遺無かりき。（『日本三大実録』原漢文）

私たちは、テレビなどで、三月十一日の痛ましい光景を、目のあたりにしました。この『三代実録』の記事は、千百年以上も前の、平安時代の記録ですが、わたしたちが目にした映像と、なんとよく似ていることでしょうか。まったく

同じ光景の描写としか思えないほどです。この貞観津波の記事は、今年の三月十一日以降、俄然、注目されるようになりました。残念ながら、わたしたちは、貴重な記録を、先人が綴った文章を、十分にはいかせなかった、ということになります。

『方丈記』も、王城の地である洛中が、いつ地震に襲われるかわからないと教えています。また、天変地異に対する都市のもろさを、冷静に描写してもいます。今年は、年明け早々に、九州の新燃岳の噴火がありました。まだ、火山活動は続いています。また、つい最近も、台風十二号による記録的な豪雨が近畿地方を襲い、和歌山県・奈良県をはじめ、各地に甚大な被害がありました。日本のあちこちで、いまなお、避難されている皆様が、たくさんいらっしゃいます。わたしたちは、脆弱な火山列島に暮らしていることを、あらためて認識しなければならない、と思います。時代は、まさに『方丈記』の時代に入った、といってもよいかもしれません。つねに、人間の力を過信することなく、自然を恐れ、警戒をおこたらないことが、大切だろう、と、ふだんから『方丈記』に接することの多いわたくしも、思いを新たにいたしました。

ところで、『古今和歌集』は巻第二十のおわりに「東歌」を収めています。「東歌」は『万葉集』の巻十四が名高く、作者不詳の短歌、いわば東日本の歌謡・民謡の類を集め、「防人の歌」など個性的な作品もあってよく知られていますが、『古今和歌集』にも、「東歌」という部類はあります。『万葉集』では二四〇首近い東歌のうち、陸奥の歌はわずか四首しかありませんでした。ところが、『古今和歌集』では、東歌そのものが十三首とぐっと少なくなるとはいえ、半数以上（七首）が陸奥の歌で占められています。平安時代になって、いちだんと中央集権化が進み、より東北地方が身近になった、ということの反映なのでしょう。

『古今和歌集』巻第二十

東歌

みちのくうた

阿武隈に霧立ちくもりあけぬとも君をばやらじまてばすべなし（一〇八七）

みちのくはいづくはあれど塩竈の浦こぐ舟のつなでかなしも（一〇八八）

わがせこを都にやりて塩竈のまがきのしまの松ぞこひしき（一〇八九）

をぐろ崎みつのこじまの人ならば都のつとにいざといはましを（一〇九〇）

みさぶらひみかさと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり（一〇九一）

最上川のぼればくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり（一〇九二）

君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなむ（一〇九三）

さがみうた

こよろぎの磯たちならしいそなつむめざしぬらすな沖にをれ浪（一〇九四）

ひたちうた

筑波ねのこのもかのもに影はあれど君がみかげにますかげはなし（一〇九五）

筑波ねの峰のもみぢばおちつもりしるもしらぬもなべてかなしも（一〇九六）

かひうた

甲斐がねをさやにも見しがけけれなくよこほりふせるさやの中山（一〇九七）

甲斐がねをねこし山こし吹く風を人にもがもや事づてやらむ（一〇九八）

伊勢うた

をふの浦にかたえさしおほひなる梨のなりもならずもねてかたらはむ（一〇九九）

これらの「東歌」の中には、現在も意味の正確にわからない歌が含まれています。一〇八八番の歌、

みちのくはいづくはあれど塩竈の浦こぐ舟のつなでかなしも

の「かなし」は「いとおしい、愛着を感じる」という意味だとされ、東北の数ある名所の中でも、塩竈の景色は特別だ、と解釈されてきました。しかし、この歌にも、もっと別の解釈が成り立つのではないか、と最近考えているところです。

さて、『百人一首』の「陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに」の作者河原左大臣、源融は、とりわけ陸奥を愛した人でした。融は、嵯峨天皇の皇子で、風流な数寄人としても知られていました。鴨川の西に、河原院という大邸宅を造営します。河原院は、現在の下京区にあり、八町の広大な敷地に、陸奥の塩竈の風景を模した大庭園が有名でした。そこには毎日、難波から海水を運ばせて、塩を焼く製塩の作業を再現し、煙を絶やさず立ちのぼらせた、と言います。

河原院は、あまりに大邸宅すぎて、融の死後、伝えられていくうちに維持管理ができなくなり、次第に荒廃してゆきました。『百人一首』の「八重むぐらしげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり」という恵慶法師の歌は、『拾遺和歌集』を出典としているのですが、その詞書（ことばがき）（詠作事情）には「河原院にて、荒れたる宿に秋きたる、といふ心を、人々よみ侍りけるに」とあります。この歌は、もともと荒れたる宿、河原院にて詠まれた歌でした。また、紀貫之にも、「君まさで煙絶えにし塩竈のうらさびしくも見えわたるかな」という、融の死後は、難波から海水が運ばれることもなく

なり、塩を焼く煙も絶えて心さびしい、と詠じた歌もあります。

源融は、嵯峨天皇の皇子でした。源氏の姓を賜って、皇族を離れます。光源氏と同じですね。実際に光源氏のモデルの一人とも考えられている人物でもありました。『源氏物語』の中でも、ひときわ人気の高い巻に、「夕顔」があります。光源氏は、夕顔を「なにがしの院」へと、ひそかに連れ出すのですが、そこで夕顔は不幸にも、六条御息所の生霊にとりつかれて、命を落としてしまいます。物語の中では「なにがしの院」として、匿名でぼかした表現になっていますが、その場所は源氏一族のゆかりの邸宅であり、たいへん広い屋敷で、「○○院」と呼ばれている、しかも、五条六条のあたりに存在したと、『源氏物語』では設定されています。源氏一族ゆかりの、鴨川のほとりの、荒廃した「なにがしの院」。それは、当時の読者なら、あきらかに「河原院」を具体的にイメージすることができたでしょう。河原院は、融が亡くなった後、宇多院へと献上されました。宇多院が京極御息所（褒子）と牛車に同車して、ひそかにお渡りになり一夜を共にした時には、融の怨霊が出現して、女性にとりついたという話も伝わっています。ですから読者は、これはきっと良くないことが起きる、夕顔が怨霊にとりつかれて落命してしまう、とはらはらしながら、固唾を飲んで読み進めていたに違いないのです。六条御息所の生霊があらわれても、当時の読者には、けっして唐突ではありません。つくり物語なのに、迫真のリアリティーをもって、読む者を、物語りの世界に引き込んでしまう、紫式部の構想は、実に巧みです。

紫式部は、「引歌（ひきうた）」とよばれる、当時の都びとなら、誰もが知っていた有名な和歌を、『源氏物語』のあちらこちらにしのばせています。『古今和歌集』の「みちのくうた」も、数多くの場面で「引歌」として引かれています。須磨・明石に流謫の生活を送った源氏が、都に帰り、末摘花を訪ねる場面があります。「蓬生」という巻です。牛車を降りた、まさにその場面は次のようでした。

…なほ下りたまへば、御さきの露を、馬の鞭して払ひつつ、いれたてまつる。雨そそきも、なほ秋の時雨めきて、うちそそけば、「御傘さぶらふ。木の下露は雨にまさりて」と聞こゆ。

みなさんも経験がおありだとおもいますが、雨上がりなどに、大きな木の下を通ると、雨の滴が落ちてかえって濡れてしまう、ということがありますね。先ほど触れました、『古今和歌集』の「みちのくうた」

みさぶらひみかさと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり（一〇九一）

は、そのような状態をうたったものです。お伴の人よ、御主人様に「お傘をどうぞ」と申し上げなさい、なにしろ宮城野の木の下の露は、ひどくしずくが落ちてきて、雨よりも濡れるから、という意味です。これを意識して惟光は、光源氏に対して「お傘がございます。木の下から落ちるしずくは、雨にまさって濡れるといけませんので」と申し上げたわけです。気の利いた、雅な振る舞いですね。有名な国宝『源氏物語絵巻』の「蓬生」では、まさにこの場面、惟光が鞭を持って露払いをして、後ろから傘をさしかけられた光源氏が、歩みを進めてゆく場面が描かれています。

『古今和歌集』巻第十四（恋四）には、

宮城野のもとあらのこ萩つゆをおもみ風を待つごと君をこそまて（六九四）

の歌があります。宮城野のもとあらの小萩は、露が重くて風が吹き払ってくれるのを待っている。その小萩のように私は、あなたのお出でをひたすら待っているのです。いい歌ですね。この歌はたいへん人気があり、紫式部もたびたび引歌として『源氏物語』に取り込んでいるくらいです。鴨長明は、来年八〇〇年を迎える『方丈記』のほかに、『無名抄』という、和歌にかかわるユニークな随筆集を残しています。そこには「為仲、宮城野の萩を堀りてのぼる事」という、短いのですが、印象的な章段があります。橘為仲は、『源氏物語』の時代よりは、一世代あとの時代、道長の息子であっ

た関白頼通のところに出入りしていた歌人です。受領階級の人で、陸奥の国守となり、奥州へと下っていました。任期を終えて、都に戻ってくる時の話です。

為仲、宮城野の萩を堀りてのぼる事

この為仲、任はててのぼりける時、宮城野の萩を掘り取りて、長櫃十二合に入れて持てのぼりければ、人あまねく聞きて、京へ入りける日、二条の大路にこれを見物にして人多く集まりて、車などもあまた立てたりけりとぞ。

「受領は倒るるところに土をもつかめ」とは、転んでもただでは起きない、この時代の受領の強欲さを表した、有名なことばです。ふつうなら、たくさんの財宝を持ち帰るはずです。しかし為仲は、十二の長櫃を連ねて、そのすべてに「宮城野の萩」を、持ち帰ってきたというのです。到着する前から、噂は都中に広がり、多くの人が見物に訪れたといいます。「車などもあまた立てたりけり」とは、特に身分のたかい貴族が、牛車で見物にやって来たことを意味します。いかに「宮城野の萩」、が王朝びとの関心を集めていたか、陸奥の風物の人気の高さが、よくわかるエピソードだと思います。

おなじく『古今和歌集』の恋四には、

名取川せぜの埋れ木あらはれば如何にせむとかあひ見そめけむ（六五〇）

という作品が見出せます。この歌も「よみ人しらず」の歌ですから、もとは陸奥の民謡のようなものだったのでしょう。名取川は、埋れ木、が有名です。埋れ木とは、地中に埋れて、長い年月をかけ石のように固くなった樹木のことです。埋れ木は名取川のほかには、阿武隈川の流域でも多く発見され、それを加工した民芸品は、埋れ木細工として、東北の伝統工芸にもなっています。和歌の世界では、名取川は埋れ木が景物、埋れ木で知られる名所でした。

三月十一日の、あの大震災の当日、テレビは名取川を逆流し、その流域を呑みこみながら、恐ろしい勢いで遡る津波の姿を映し出していました。後で知ったのですが、名取川の流域では、海岸線から、約六キロの内陸まで津波が到達したのだそうです。京都の地下鉄で、京都駅から北大路までが、だいだい六キロ少々です。京都駅から北大路まで走って逃げないと、助からないということになります。津波の速さ、恐ろしさが、よくわかります。テレビは、海岸沿いの松林でしょうか、夥しい樹木がなぎ倒されて、名取川の奥へ奥へと運ばれていく様子を映していました。見ていて、私は、はっとしました。「名取川」流域の地中に眠っている樹木は、どうして内陸部へと運ばれて埋まっていたのか、それは、ひょっとして太古の昔から、このような津波がくりかえし東北地方を襲い、そのたびに、内陸へと運ばれたからではなかったか。後になって、ほぼ八〇〇年から一一〇〇年に一度という長い間隔で、この地域には大津波が襲来していたことを知りました。名取川の埋れ木が、古歌に詠まれている理由が、こうして理解できたのです。

『百人一首』には、次のような歌があります。

契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは（清原元輔）

清少納言の父、清原元輔の歌です。約束したはずですよね、お互いに涙で濡れた袖をしぼりながら、あの「末の松山」をけっして波が越えないように、私たちの愛も永久に変わらないと、でも、あなたは心変わりしてしまった。相手の心変わりを嘆いた歌です。もとになっているのは、これも『古今和歌集』の「みちのくうた」です。

君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなむ（一〇九三）

資料には、私どもが大学の講義で、学生のテキストとして使用する、古典の代表的な注釈をいくつかあげてあります。どれも意味するところは、同じです。はじめの〈小学館古典文学全集〉の訳には「あなたをさしおいて、ほかの人に心

を移すなんてことがあろうものならば、あの、海岸にそびえる末の松山を、波が越えてしまうでしょう」（心の変わらないことを誓った、平易で明快な、民謡風の歌である。男女何れがうたった歌ともとれる）とあります。〈新潮社〉や〈岩波書店〉の本によれば「末の松山」について、「この山を波はけっして越えないもの、という前提で詠まれている」（新潮古典集成）。「波が越えるはずがないとしていう」（岩波新日本古典文学大系）という語釈も添えられてあります。『源氏物語』でも、この「末の松山」の歌は人気が高く、

うらなくも思ひけるかなちぎりしを松より波はこえじ物ぞと（明石・紫の上）

「明石」の巻で、光源氏が、明石の上に浮気心を起こして通う頃に、都へと手紙を贈ります。正妻の紫の上から、裏切られることはないと信じております、という返事の歌が届きます。そこには、あきらかに「末の松山」の歌が踏まえられています。また、次の歌

波こゆるころともしらず末の松まつらんとのみ思ひけるかな（浮舟・薫）

「浮舟」の巻では、浮舟が夫である薫の慎重で落ち着いた振る舞いに信頼を寄せながら、一方で行動的で情熱的な匂宮との不倫の愛に溺れてゆくのですが、それが左の岸にも右の岸にも舟を着けることができずに、二つの岸の間で荒波にただよう浮舟のようだと、彼女は我が身を呪うのです。この「波こゆるころともしらず」という歌は、夫である薫が、浮舟と匂宮との不倫を知り、「ああ裏切られていることも知らずに、私は」と浮舟のもとへと贈ってきた歌です。これが、また、浮舟を追いつめてゆく、そしてついに宇治川への入水へと、物語は進んでいくことになります。

このほかにも、『源氏物語』で、『古今和歌集』の「末の松山なみもこえなむ」が引歌として引かれた場面は、まだまだあります。それほど、この歌は有名でした。

『古今和歌集』の歌枕、「末の松山」は、どこを指すのか。現在もなお、複数の説が存在します。宮城県多賀城市八幡、同じく石巻市須江、岩手県二戸市浪打峠、福島県いわき市、などです。通説では、宮城県多賀城市とする説が有力です。『奥の細道』で芭蕉が訪れたのも、多賀城市の場所です。

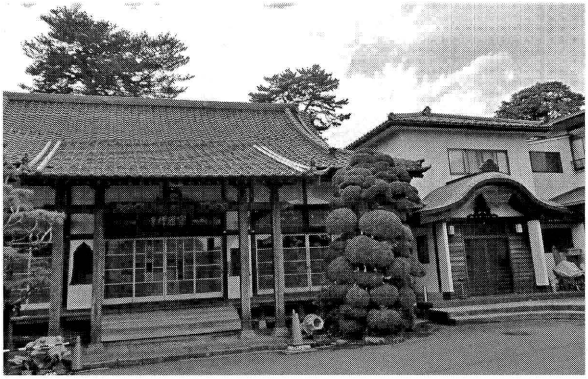
末の松山は寺をつくりて末松山といふ。松のあひあひ皆墓原にて、羽をかはし枝をつらぬる契りの末も、つひには、かくのごときと、かなしさもまさりて、塩竈の浦にいりあひの鐘を聞く。

「末」の「松山」で「末松山」。現在の末松山宝国寺の裏山に大木の松がありますが、それにあたります。傍らには墓地が広がり、少なくとも芭蕉の元禄時代には、ここが末の松山だと信じられていたことは確かです。

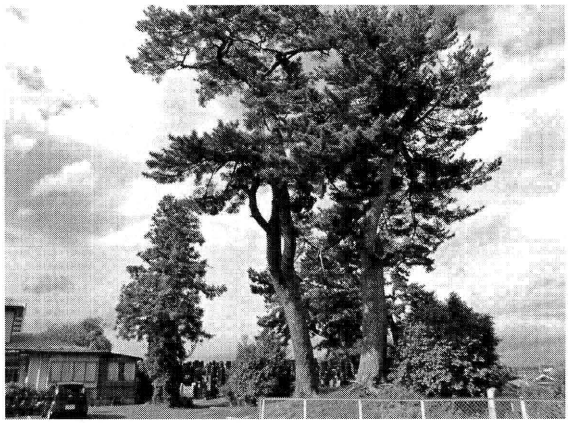
奥州に惹かれて、おそらく最もはやく行脚の旅に赴いた隠者に、能因法師が挙げられると思います。平安末期の歌僧である顕昭の『袖中抄』には、現在は散佚して伝わっていない『能因坤元儀』という書物が引かれており、そこには、「能因坤元儀には、本の松山、中の松山、末の末山とて三重にありといへり」とあります。おそらくは松の生い茂った小高い丘が、三つほどあり、そのうち最も遠ざかった、奥まったところにあるのが末の松山ということになるのでしょう。末の松山、というのは、普通名詞に限りなく近い名称といってもよいかもしれません。

さきほどの、『日本三代実録』の記事は、陸奥の海岸部を襲った巨大津波と、その被害の甚大さを伝えていました。実は、歴史地理学の碩学、吉田東伍博士は、明治三十九年の論文で、『日本三代実録』の貞観津波に注目され、「城下」とあるが、貞観十一年に、東北地方で公的な「城」と呼べる物は、まず多賀城であること、他に考えられるものとして、胆沢城があるものの、北上川のはるか上流の内陸部で、いかに大津波でも遡り得ない、だからこれは多賀城の津波を描写した文章だ、と指摘されています（「貞観十一年陸奥府城の震動洪溢」〈歴史地理第八巻十二号〉）。

私は、三月十一日から、名取川の埋れ木や、末の松山が気になっておりました。ご迷惑にならない、三か月以上過ぎた頃に、現地へと出かけてみました。多賀城市内の末松山宝国寺を訪れ、ご住職からも、わずかの時間でしたが、お話を聞くことができました。本堂の後ろに見えている松が、「末の松山」の松です。津波は、ちょうど本堂の階段の一段目まで、到達し、そこで、止まったということでした（図版1）。末の松山の松は立派な姿で、堂々と立っていました。近くの二階建てのお宅や自動車などと較べていただければ、その巨大さが、おわかりいただけると思います（図版2）。末の松山から百メートルほど海側に下った民家には、明らかに津波の被害が見てとれました。さらに百メートルほど海岸に近づくと、もうそこは痛々しい瓦礫の山でした（図版3）。また、日本地理学会の津波被災マップ（http://map311.ecom-plat.jp/map/map/?mid=40&cid=3&gid=0）を参照すると、さらに驚くべき事実



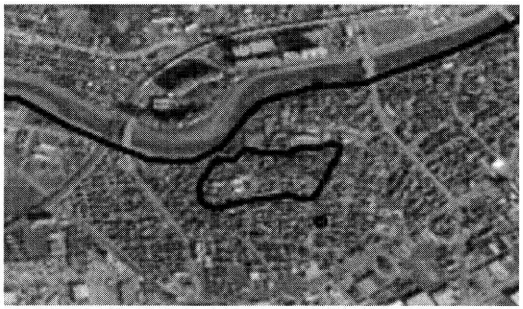
図版1



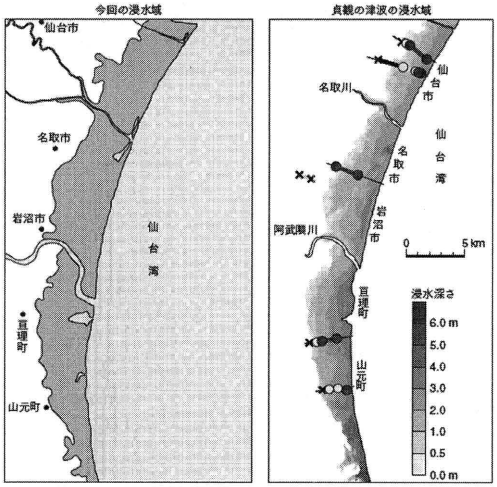
図版2

がわかりました。末の松山の周辺域だけ、孤島のように津波の被害が及んでいないのです（図版4）。このあたりは、ほぼ海抜は0メートルから一ケタ台なのですが、末の松山の周辺部のみ、十メートルを超えております。ここだけが、あたかも津波の避難ビルのように、津波の被害をまぬがれた、ということになります。現地では、津波が来たらとにかく末の松山に逃げろと子どもの頃から言われてきたので、その通りにして助かった、という住民の方にもお会いしました。さらに、自然科学の分野、島崎邦彦博士の論文（「超巨大地震、貞観の地震と長期評価」〈『科学』平成二十三年五月号〉）

図版3（中央に末の松山の一部が見える）



図版4（中央部分の楕円が末の松山の所在地）



図版5（島崎氏の論文より引用）

を参照すると、貞観津波の時の堆積物の分布と、今回の津波到達域とが、一致していることに驚かされます（図版5）。多賀城市周辺部はボーリング調査によるデータがないそうですが、しかし、貞観津波と今回の津波の到達域が一致しているとすれば、宝国寺の裏山、すなわち末の松山には津波は押し寄せてはこなかった、末の松山に避難していれば貞観地震の時も助かった、津波の被害からまぬがれたことは、かなりの確率で言えるのではないでしょうか。

もう一度、『古今和歌集』の「みちのくうた」を眺めてみますと、阿武隈川、最上川などの、東北を代表する大河は別格として、そのほかは、国府のあった多賀城周辺の地域の名所が撰ばれているのがわかります。やはり『古今和歌集』の「末の松山」は、ここで間違いないだろう、と思うのです。多賀城市内の海岸部では、現在も、末の松山はどこからでも見えるランドマークです（図版6）。とにかく、あそこに逃げれば助かる、いや助かった、という往時の人々の忘れ得ぬ体験が、けっして波が越えることはない、という歌枕「末の松山」を生み、あの『古今和歌集』の「みちのくうた」になったと思われてくるのです。

図版6

そうであれば、「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ」の歌の本来の意味は、私がもし浮気心を起こしたら、あの末の松山をさえ波が越えてしまう、世界が破滅するような恐ろしいことが起こる、だから、私は永遠にあなたを心変わりすることなく愛し続ける、愛し続けなければならないのだ、という強い決意、誓いの歌だったのかも

知れません。

『古今和歌集』の「みちのくうた」には、本来は貞観津波の折の、哀しい記憶や口承、さらに民謡などが多く取り込まれているのではないか、と思えてきます。まだまだ、『古今和歌集』には、解明しなければならない謎が多く残されている、と痛感した次第です。

もし、みちのくの歌々がなかったなら、『古今和歌集』も、『源氏物語』も、そしてその後の古典も、随分と違ったものになっていたはずです。豊かなみちのくの歌々を生んだ、王朝びとあこがれの東北が、一日もはやく復興されることをお祈りしつつ、結びとさせていただきます。

どうもありがとうございました。

〔付記〕六月、慌ただしい中、お話を聞かせていただいた末松山宝国寺およびその周辺にお住まいの皆々様に、心より御礼申し上げ、御地の一日も早い復興を祈念いたします。小稿は、平成二十三年十一月一日開催予定の「古典の日推進フォーラム」（国立京都国際会館メインホール）の講演「鎮魂 あこがれの東北――方丈記、源氏物語、そして古今和歌集――」にむけて準備した講演原稿を、そのまま寄せたものです。その大半は京都市生涯学習総合センター山科での講演「東日本大震災と古典――先人は東北の津波をいかに伝えたか――」（平成二十三年八月三十一日）の内容と重なります。震災直後の三月下旬、「方丈記に関わる内容で七月二十日に…」とのご依頼でしたが、その場で、方丈記に末の松山・名取川など被災地の歌枕と古典和歌もテーマに加えるかたちで、と我が儘な構想を申し上げ、ご了解をいただきました。現地調査の後、七月半ばにはパワーポイント用のファイルも資料もセンターに送り準備は万全でしたが、「想定外」の台風襲来による警報発令に、二時間ほど前に急遽中止

となってしまいました。それにもかかわらず、「お蔵入りは惜しい」と年間計画の日程をやりくりして一か月後に再び講演会を設定してくださった関係各位に、深く感謝申し上げます。そもそも一連の講演は、およそ三十年ほど前、川村晃生先生の第一回ゼミ旅行で、末の松山ほか東北の歌枕を各地に訪ね歩いた折の感動に端を発するものでした。御退職記念号への寄稿は、そのような理由によることを申し添えます。